

『よっ まったく
朝から寝ぼけた顔だね!!』

アキ姉――

1つ上の隣のお姉ちゃん
一人っ子同士のボク達は
姉弟同然に育った

ボクは昔から
人と話すのが苦手だ

ボクがいじめられるといつも
アキ姉が助けてくれる

ボクはそんなアキ姉に
ずっと幼馴染以上の
気持ちを抱いている



『どう? ●校は慣れた?
最近ずっと浮かない顔じゃん』

アキ姉はそんなボクのこと
多分男としては見てくれて
いない――と思う

ボクは●校生になっても
弱いボクのまま
アキ姉への気持ちを
伝えられずにいた

それに●校に入って
ボクはまたいじめの標的に
されていた



アキ姉に思い切って
相談してみることにした

こんな年になっても
アキ姉に頼らなきゃいけない
自分が情けない

入学した時からその金髪が目立っていた

ずっと嫌な予感がしていたけど
案の定ボクは目を付けられた
喧嘩も強くて地元じゃ有名な
DQNってやつだ

『大丈夫そんな悪ガキ
私が躰けてやるって!!』

アキ姉は笑顔でボクに
そう約束してくれた

子供の時から見上げるだけの
その笑顔—
ボクが憧れているなんて
知らないんだろうな



アキ姉の部屋にDQNを
呼び出し
話を付けてくれる
ことになった

何もかも任せきりなのは
悪いからボクは外で待っている
ことにした

当日—

アキ姉の部屋にDQNが
入ってしばらくすると
アキ姉から連絡があつた



どうやら丸くおさまったようだ
僕は言われるがまま
アキ姉の部屋に入った



アキ姉？

訳が分からなかった
アキ姉のベッドで
DQNがアキ姉に裸で
跨っている――

「おwまじできたw
これお前の幼馴染の姉ちゃん
なんだつて？w
なんか初対面でいきなり
馴れるだとか言ってきたから
逆に馴けてやったわwwww」

セックス――
今まで映像でしか見たことのない
ヒト同士の交尾が
目の前で行われている――

「最初は抵抗してきたけど
チンポ突っ込んでやったら
雌らしく鳴きはじめてw
何回かイカせたら言う事
聞くようになったわwwww」

へらへらと笑いながら
ボクに話かけてくるDQNの下で
アキ姉は弱弱しく縮こまって
余裕なく甘い声を上げ続けていた

DQNの下半身の動きに合わせて
その体はぶるぶると震え痙攣する

『ほーらW顔みせてやれよWWW』

へえあゝ

DQNに持ち上げられた
アキ姉の顔には
かつてのような
凛々しい面影は
無くなっていた

『なんかお前を守るだとか
言っただけこのザマよww
雌が雄に勝てるわけねえのになww
でもコイツ気に入ったからしばらくは
楽しませてもらおうww』

『よしそろそろ
マジピストンキメっぞW
気合入れろよ? W』

『オラオラ休憩は終わりだ!』

アキ姉の体を振り回すように体勢を替え
こちらに見せつける様に
動物みたいなビストンが始まったー
ボクはそれを啞然として見ている事しか
できなかった

『は?wんだこいつw
見られてっから
アクメしない様に
踏ん張ってやがるww』

『さっきまでみてーに
だらしねえ声あいつに
間かせてやれよwww』

『オラ!アクメ晒せwww』

アキ姉は今まで見たこともないような
酷い顔で歯を食いしはばるー
女としての最後の抵抗
奴のペニスで突きあげられるたび
食いしはばった歯の間から嬌声がこぼれる



『ハハハwwwマ●コまで
食いしはばってやがるwww
もうイキそうだろwww
ほら遠慮なくイケwwwソ豚w』

ビストンがいっそう早くなる
太い腕でがっしりと上体を固定され
快楽から逃げられないようにされた
アキ姉の豊満な体は小刻みに震え
絶頂を堪えるのももう限界ということが
傍から見ても明らかだった



おほおっ
おっ
おっ

んぎっ

おっ

んぎっ
んぎっ
んぎっ

ひっ
ひっ
ひっ

おっ

『ひやはっはwww
ガマンした分すっげえアクメwww
マ○コうねうねしてんぞwww』

獣のような唸り声―
低く下品な嬌声を上げ
アキ姉はボクの目の前で
雌としての快楽を叩き込まれた
その顔はもはや
ボクの大好きだった笑顔が眩しい
幼馴染のお姉さんではなく
男とまぐわい動物的な快楽を貪る
雌の顔だった―

ジュッパッ

『お前さ、
こんな雌に助けてもらおうなんて
恥ずかしくねえの？
まあこれからは代わりに
こいつで遊ぶから
お前はもういいわw帰れ』

雄として格の違いを見せつけられた
ボクはその言葉に従うしかなかった
背中聞こえるアキ姉の喘ぎ声が
いまでも忘れられない―

今日もお前の代わりに
たっぷり遊んでもらったぜ

7:34

UNKNOWN

今度会ったら礼言っとけよ～

7:35

UNKNOWN

アキ姉とボクは
顔を合わせなくなった

それからボクは
あいつにいいめられることは
なくなった—そのかわり

今までずっと一緒だった
大好きな幼馴染のお姉さんは
もうどこにもいない—



定期的にあいつからアキ姉の
近況が送られてくる—

いや—そこに映っているのは
アキ姉だった人

今となつてはボクと何の関係もない
下品で卑猥な女だ

7:35









ド

たはん♡

たはん♡

ズー



今日もお前の代わりに
たっぷり遊んでもらったぜ

7:34

UNKNOWN

今度会ったら礼言っとけよ～

7:35

UNKNOWN



7:35

『よっ まったく
朝から寝ぼけた顔だね!!』

アキ姉――

1つ上の隣のお姉ちゃん
一人っ子同士のボク達は
姉弟同然に育った

ボクは昔から
人と話すのが苦手だ

ボクがいじめられるといつも
アキ姉が助けてくれる

ボクはそんなアキ姉に
ずっと幼馴染以上の
気持ちを抱いている



『どう? ●校は慣れた?
最近ずっと浮かない顔じゃん』

アキ姉はそんなボクのこと
多分男としては見てくれて
いない――と思う

ボクは●校生になっても
弱いボクのまま
アキ姉への気持ちを
伝えられずにいた

それに●校に入って
ボクはまたいじめの標的に
されていた



アキ姉に思い切って
相談してみることにした

こんな年になっても
アキ姉に頼らなきゃいけない
自分が情けない

入学した時からその金髪が目立っていた

ずっと嫌な予感がしていたけど
案の定ボクは目を付けられた
喧嘩も強くて地元じゃ有名な
DQNってやつだ

『大丈夫、そんな悪ガキ
私が躰けてやるって!!』

アキ姉は笑顔でボクに
そう約束してくれた

子供の時から見上げるだけの
その笑顔——
ボクが憧れているなんて
知らないんだろうな



アキ姉の部屋にDQNを
呼び出し
話を付けてくれる
ことになった

何もかも任せきりなのは
悪いからボクは外で待っている
ことにした

当日——

アキ姉の部屋にDQNが
入ってしばらくすると
アキ姉から連絡があった



どうやら丸くおさまったようだ
僕は言われるがまま
アキ姉の部屋に入った



アキ姉ー？

訳が分からなかった
アキ姉のベッドで
DONがアキ姉に裸で
跨っているー

『おwましてきたw
これお前の幼馴染の姉ちゃん
なんだって？w
なんか初対面でいきなり
騎けるだとか言ってきたから
逆に騎けてやったわwww』

セックスー
今まで映像でしか見たことのない
ヒト同士の交尾が
目の前で行われているー

『最初は抵抗してきたけど
チンポ突っ込んでやったら
雌らしく鳴きはじめてw
何回かイカせたら言う事
聞くようになったわwww』

へらへらと笑いながら
ボクに話かけてくるDONの下で
アキ姉は弱弱しく縮こまって
余裕なく甘い声を上げ続けていた

DONの下半身の動きに合わせて
その体はぶるぶると震え痙攣する



『ほーらw顔みせてやれよwww』

へえあー

DONに持ち上げられた
アキ姉の顔には
かつてのような
凛々しい面影は
無くなっていた

『なんかお前を守るだとか
言ってたけどこのザマよw
雌が雄に勝てるわけねえのになw
でもコイツ気に入ったからしばらくは
楽しませてもらおうw』

『よしそろそろ
マジピストンキメっぞw
気合入れろよ？w』

『オラオラ休憩は終わりだ!』

アキ姉の体を振り回すように体勢を替え
こちらに見せつける様に
動物みたいなビストンが始まったー
ボクはそれを啞然として見ている事しか
できなかった

『は?wんだこいつw
見られてっから
アクメしない様に
踏ん張ってやがるww』

『さっきまでみてーに
だらしねえ声あいつに
間かせてやれよwww』

『オラ!アクメ晒せwww』

アキ姉は今まで見たこともないような
酷い顔で歯を食いしはばるー
女としての最後の抵抗
奴のペニスで突きあげられるたび
食いしはばった歯の間から嬌声がこぼれる



『ハハハwwwマ●コまで
食いしはばってやがるwww
もうイキそうだろww
ほら遠慮なくイケwwwソ豚w』

ビストンがいっそう早くなる
太い腕でがっしりと上体を固定され
快楽から逃げられないようにされた
アキ姉の豊満な体は小刻みに震え
絶頂を堪えるのももう限界ということが
傍から見ても明らかだった

お

獣のような唸り声——
 低く下品な嬌声を上げ
 アキ姉はボクの目の前で
 雌としての快楽を叩き込まれた
 その顔はもはや
 ボクの大好きだった笑顔が眩しい
 幼馴染のお姉さんではなく
 男とまぐわい動物的な快楽を貪る
 雌の顔だった——

ジュアパパ♡

雄として格の違いを見せつけられたボクはその言葉に従うしかなかった背中であけるアキ姉の喘ぎ声がいまでも忘れられない――

今日もお前の代わりに
たっぷり遊んでもらったぜ

7:34

UNKNOWN

今度会ったら礼言っとけよ～

7:35

UNKNOWN

アキ姉とボクは
顔を合わせなくなった

それからボクは
あいつにいいめられることは
なくなった—そのかわり

今までずっと一緒だった
大好きな幼馴染のお姉さんは
もうどこにもいない—



定期的にあいつからアキ姉の
近況が送られてくる—

いや—そこに映っているのは
アキ姉だった人

今となつてはボクと何の関係もない
下品で卑猥な女だ

7:35

『オラオラ休憩は終わりだ!』

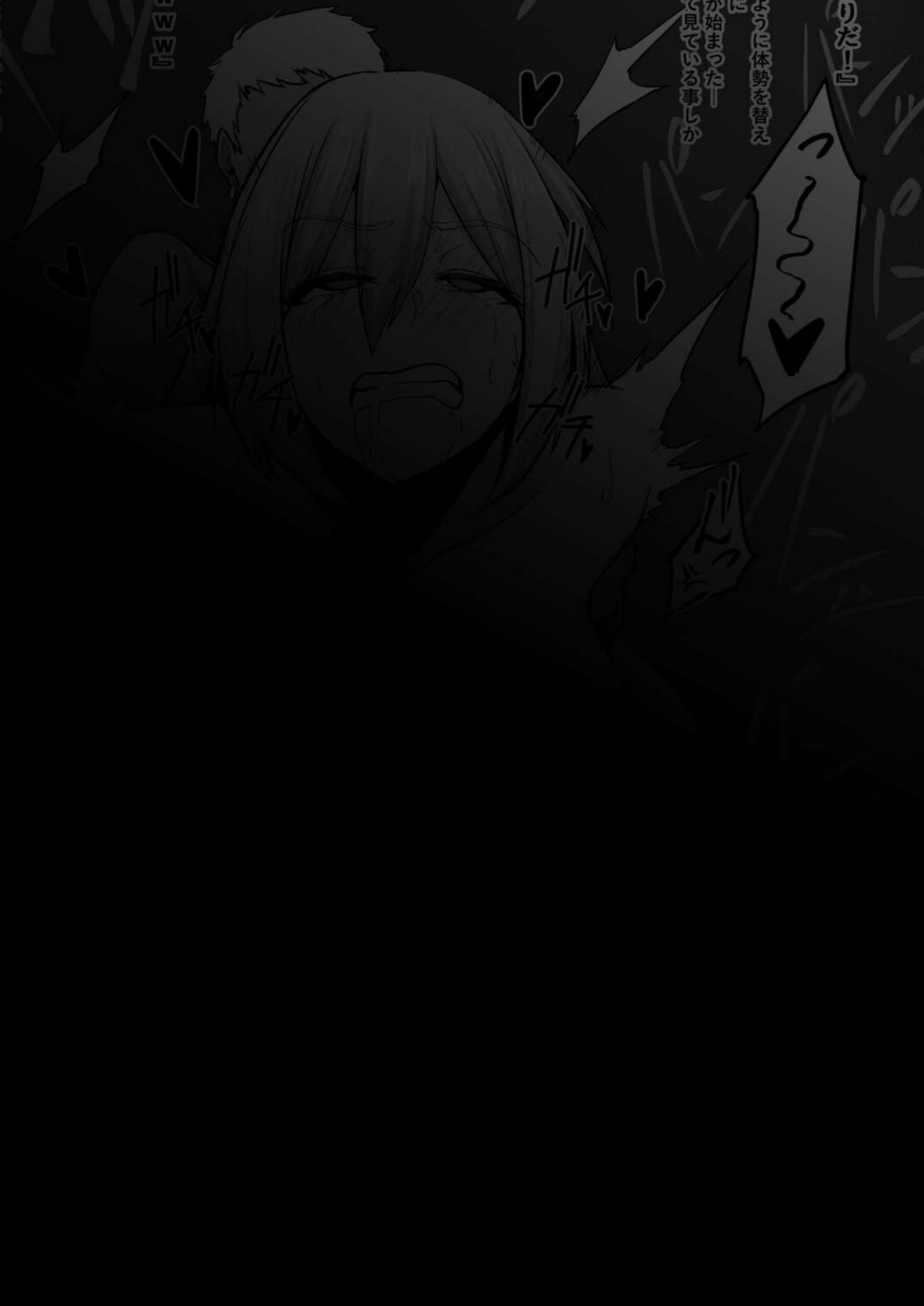
アキ姉の体を振り回すように体勢を替え
こちらに見せつける様に
動物みたいなビストンが始まった—
ボクはそれを唾然として見ている事しか
できなかった

『は?wんだこいつw
見られてつから
アクメしない様に
踏ん張ってやがるww』

『さっきまでみてーに
だらしねえ声あいつに
聞かせてやれよwww』

『オラ!アクメ晒せwww』

アキ姉は今まで見たこともないような
酷い顔で歯を食いしばる—
女としての最後の抵抗
奴のペニスで突きあげられるたび
食いしはった歯の間から嬌声がこぼれる



今日もお前の代わりに
たっぷり遊んでもらったぜ

7:34

UNKNOWN

今度会ったら礼言っとけよ～

7:35

UNKNOWN





年上お姉さん
オラオラ系DQNに

返り討ちにされ
雌堕ち